
空の色

朱鷺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の色

【コード】

N6595X

【作者名】

朱鷺

【あらすじ】

『知っているか？

空って青いらしい。』

空の色を覚えてくれた君は、もう居ない。

プロローグ

『日本』と呼ばれた国での出来事である。

日本は外国からの植民地化を防ぐ為、地下へと潜った。

鉛の天井で覆われ、灰色の超高度セキリユティー機械、『CROW』（クロウ）と呼ばれる円状の黒いドーム状に覆われた大都市、『東京』での出来事である。

日本は独自の文化と独自の戦術を会得した。

戦術方法……。

物との『契約』により、物を自在に操る事が出来る術を身に付けた。

この術を統べる者を『死神』と呼び、『死神』を育てる学校を『私立東京死神教育専門学校付属第三高校』

その学校で起こった……たった五人……たった五人の小さな勇気が起こした起こした、大きな事件。

プロローグ（後書き）

始まりました。

世界観は分かっていただけでしたか？

宜しく願います。

死神になる。

沢山の生徒が行き来する中。

桜舞い散る下で『私立 死神教育付属第三高校（しりつ しにがみ きょういくふぞくだいさんこうこう）
入学式』と書かれた大きな札が門に立て掛けられているのを見ながら、私は、正門を潜った。

門を通り過ぎると、空を見た。

鉛で出来たの空が人口光を放って輝いている。

息を大きく吸うと、心なしか春の匂いがした。

そう……。今日から……。

今日から私は死神になるんだ……！！

『死神』……。

死神の役割は大きく分けて3つ。

『鬼』と呼ばれる霊が行う犯罪などを食い止める。

死した者の成仏させる。

この世のバランスを崩そうとする者、魔女や鬼を始末する。

大変な仕事だけど、とっても遣^やり甲^{がい}斐^いが有りそうで・・・。

お父さんもお母さんも死神の役職を持っている。

だから私も、最高に格好良くて、クールで、強い死神になってやるんだ・・・!!

死神になる。(後書き)

死神について、です。

説明不足ですいません。

後ほどもっとくわしく説明します。

続きもどうぞ。

入学式ってこんなのだっけ？

急いで入学式会場・・・もとい、体育館の方へ行くと、

・・・パーティーが行われていた。

金色のシャンデリアの光に、ピンクのマットレスが床にひかれており、一見金持ちたちが集まるパーティーかと思う程の豪華っぷりだった。

・・・えっと。今日って、入学式だよね・・・？

入学式ってこんなのだっけ・・・？

父兄の人はドレスアップしていて、生徒の人達は数人で固まってご飯を食べているのを横目で見ながら中に足を踏み入れる。

とりあえず身近にいた大人に「・・・ココって、死神高校（学校名が長いから訳させてもらうね）の入学式ですよね・・・？」と聞いてみると、大人は揃って頷いた。

・・・えっと。本当？

扉を開ける事、それがプロローグ

とりあえず入って、近くのソファアームに座る。

中学校時代の友達は、全員他の高校に行っちゃったから、友達はいない。

私って、結構人見知りなんだよねえ……。

友達、出来るかな……。

思わず周りを見渡し、同級生の女子達を探す。

自分から話しかける勇気が無いくせに、人からは構ってほしい……。

そんな考えを持っている自分に嫌気がさして、溜息をつく。

鞆の中から入学式案内の紙を取り出して、読む。

注意書きの項目に書かれた『入学式の日には試験を行います。その試験に合格出来なければ、入学は撤回させていただきます。』という言葉。

きっと、入学式が終わった後に教室で筆記試験とかするんだろう。

勉強してきたけど、受かると良いな……。

「……少しその紙、見せてくれませんか？」

目の前から声がして顔を上げた。

そして思わず、息をのんだ。

・・・何だよこの少年!?

黒猫を思わせる程に真黒な髪が撥ねまくっていて、それに黒縁の眼鏡。制服もちゃんと着ていなくてだらしなく着ている。右手にブカブカで今にも落ちそうな程の金色の腕輪を二本はめて、スケートボードで移動している少年が目の前にいた。

・・・何と言う・・・。

「・・・そのパンフ。見せてくれませんか？」

パンフ「パンフレット、パンフレット」入学案内の紙、というのが分かるまで数秒かかった。

「・・・どうぞ。」

と紙を渡すと「どうも。」と言ってから入学案内の紙を読み始める。

光の反射で眼鏡の奥が見えない。

少年は「・・・入学式の始まるのは五分後ですか・・・。」とかなんとか言っつて続きを読む。

・・・って、持ってきてないの?!

しかも、紙読んでないの？

少年は一読した後、紙を私に反して

「有難うございます。」

とだけ言ってから、啞然としている私の前をスケートボードに乗り、通り過ぎようとした。

私は何を思ったか、「待つて……。」と少年に向かって言った。

少年はスケートボードを止めて、「はい？」と顔だけコチラに見せてくる。

……何言っただら。私。

「……な、なんか変じゃない？この入学式。」

とりあえず思っただ事を言ってみる。

少年は、呆気にとられた様な顔を二三秒した後、少年はニヤリと笑い、言い放ったのだ。

「このパーティー、入学式じゃないですよ。」

……は？どういう事……？

少年は、頭をボリボリと搔いて、溜息をついた。

美人少女に騙されてはいけない。

扉を開けると、白をモチーフにしたシンプルだが綺麗な玄関だった。

・・・親父はこんな趣味だったんだな。初めて知った・・・。

俺は段ボール箱を玄関に下ろし、靴を脱いで、コートと帽子を脱いだ。

欠伸を噛みしめながら、手前に有るドアを開ける。

思わず固まったな。

ドアの向こう側には、10歳かそれ以下の年の小さい少女が、カップに入った紅茶を飲もうとカップを口の所まで運びかけた所で固まり、コチラを物不思議な顔で見ている・・・のは対して驚かなかった。

のだが、

栗色の腰まである程に長い髪を結ばずに後ろに垂らし、白は白でも透き通る様な白い肌を持ち、大きな目は東洋の血が有るのか知らないが、日本人離れた紺色の瞳孔が覗いている。

白い長袖のTシャツに赤いチェック柄のスカート、黒いハイソックス。

首からは金色に光る人差し指程の大きさの小さな笛を掛けていた。

つまり、あり得ない位に美人・・・いや、可愛い女子が座っていた。

勘違いしないでほしいが、俺はロリコンではない。これは本当だ。

そして、美人な少女はカップをゆっくりと机に置いて言った。

「……誰？見るからに不才な馬鹿面下げた馬鹿は。」

……毒舌だった。

探検と好奇心。それが全ての始まり。

・・・えつと・・・。毒舌？

「誰か、って聞いているの。こんな事も分からない程無能なの？お前みたいなヤツと話すならヤモリと話したほうがマシよ。この、ポンコツ野郎。」

思わず溜息をついてしまった。・・・毒舌というか・・・何と云うか・・・礼儀知らずというか・・・。言っておくが俺の方が年上だぞ。絶対に。

息をゆっくりと吐く。落ち着け、俺。相手は子供。子供なんだから大人の様に広い心で・・・。

俺は一先ず^{ひしま}落ち着き、薄く笑いながら

「俺は、朝賀^{ともが} 凜^{りん}。朝賀^{ともが} 楼^{ろう}の息子だ。・・・ポンコツ野郎じゃないから、その辺は宜しく。」

少女は一瞬驚いた様な顔をして、それから睨むようにして俺を見てから又驚いた様な顔になって「・・・アンタ・・・そのヴァイオリン・・・。」と呟いた。

首を曲げて、ヴァイオリンケースを見る。

・・・俺のヴァイオリンを知っているのか？

再び少女は俺の事を睨むようにしてみた後、鼻を一回鳴らして紅茶

を飲んだ。

・・・えっと、そしてこの子は誰だ？

考える前に答えが浮かんだ。

親父の遺言に書いてあった事。

『私の養子の空音を頼む。』

もしかして、彼女がその養子という事か・・・？

俺が突っ立っていると、少女は不愉快極まりない顔を隠そうともせず

「・・・何？何突っ立ってんの？」

・・・他に何をしろというのだ。俺はとりあえず、ドアを閉めて段ボールの箱を持ち上げて家の中をウロウロし、空き部屋を見つけた。・・・きつとココが俺の部屋だろう。そう信じたい。そうであってくれ。

少し狭い六畳程の部屋だが、まあ荷物も少ないし良いだろう。

とりあえず段ボールを置き、ヴァイオリンケースを開ける。

「・・・何時間も出さなくて悪かったな・・・。」

ヴァイオリンに向かって呟いてみる。

俺は、このヴァイオリンを『LARGO・SLUR』（ラルゴ・スラー）と呼んでいる。まあ、長いのでスラーか、ラルゴで呼んでいるが。

『LARGO・SLUR』。コレがこのヴァイオリンの名前……
というか、イメージだ。

LARGOは『幅広く緩やかに』の意味で、SLURは、『音と音を繋げる』の意味を持つ。両方とも音楽記号だ。

流石、親父から貰った物だから、ソコソコの高級品だ。

とりあえず俺は暇なので、部屋場所を覚えるのも兼ねて、別荘を探検する事にした。

探検……。

たったこれだけの事で俺の人生は変わった。

ピアノの音で

ブラブラと別荘の中を歩き、大方の別荘の配置を覚えた時だった。

ポーン

というピアノの音がした。直感的にラの音だと分かる。絶対音感と言える程自信が有るわけではないが、だが……。何処からピアノの音がする？

今まで覗いてきた部屋の中で、ピアノが置いてある部屋は無かった。

それどころか、楽器が置いてある部屋さえも。

楽器コレクターである親父が、楽器専門部屋みたいなのを作らないわけがない。

俺は、導かれる様に音のする方へ行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6595x/>

空の色

2011年10月30日01時20分発行